

新・瘠我慢の説

經濟學者
渡辺利夫

第六回 独立こそが立国の目的である

幕末期、欧米列強によるアジア進出には狼藉たるものがあつた。アヘン戦争によつて香港がイギリスに割讓され、沿海部の主要都市が列強によつて次々と蚕食された。ペリーの黒船来航により日本もアメリカの砲艦外交を受け屈辱的な開国を余儀なくされた。アメリカに次いで他の諸列強との間で修好通商条約といわれる不平等条約を強要された。関税自主権が認められず、外国人に対する裁判権のない治外法権状態を押し付けられた。攘夷運動が高まりをみせたものの、一瞬の花火でしかなかった。明治新政府の指導者は、日本が

不平等条約を強要されたのは日本が欧米列強から文明国とはみなされていないからであり、かかる状態から脱する道はただ一つ、日本自体が西洋に倣つて文明化する以外にはないと決意した。「五箇条の御誓文」の第五条「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」がこれである。

文明国を文明国たらしめている物的生産力、社会制度、法体系とはいつたいいかなるものか。これを自分の眼で観察するための使節団が組成された。右大臣・岩倉具視を特命全權大使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などを副使官とする

維新の主役を中心に、総勢百名を超える使節団が欧米十二カ国を実に一年九カ月にわたり訪問した。新生の明治政府自体がユーラシア大陸を長駆一巡することき壮挙だった。

使節団出発の明治四年といえ、その七月に廃藩置県が断行され、幕藩体制が崩壊したばかりの頃であった。不平士族と呼ばれる諸勢力が各地で新政府への反抗の刃を研いでいた。新政府の中樞部が日本を留守にすることなど想像しにくい状況にあった。旧体制に替わる政治、経済、社会制度をどうやって建設するか、文明国の文明国たる所以を新政府自身が確認したいという熱望が、このリスキーな行動を促したのである。

大陸横断鉄道、造船所、紡績工場、倉庫、石畳、水道、博物館、図書館、ガス灯、ホテル、アパートなど、さらには共和制、立憲君主制、徴兵制、議会制度、政党政治などの文明のありとあらゆる側面について修得した。使節団の実感を一言でいえば、文明国のもつ文明の圧倒的な力であった。

その後の日本の富国強兵・殖産興業政策、さらには憲法と議会制度があきれるほどの速さで実現されていったのは、使節団の体得した知見のゆえであった。

福澤諭吉は岩倉使節団に参加できなかったものの、そこにいたるまでにすでに三度の洋行、安政六年（一八五九）には日米修好通商条約の批准交換のために渡米、文久元年（一八六一）には文久遣欧使節団に加わってヨーロッパへ、慶応三年（一八六七）には幕府使節団員として再度の渡米を敢行していた。これらの経験から得た欧米の状況についての記録を明治三年までの間に『西洋事情』という十冊の著作として刊行した。福澤はさらに明治八年（一八七五）には『文明論之概略』を著し、文明とはそもそも何なのか、日本は文明化をいかに進めるべきかを、深々とした論法をもって記述した。福澤の数ある著作の中でも最も大きなエネルギーを注いで書かれたものが本書である。議論の密度、文筆の格調、説得力からみて、私はこれが近代日本

の最高の名著だと考える。

明治は文明化に日本の存亡をかけた時代であった。岩倉使節団という明治新政府の中樞が、建國期の最も繁忙で危険な時期に長期をかけて文明國の視察に赴いたこと、それに先立ち、のちに明治最高の知識人となる福澤諭吉がもてる才能と胆力によって文明の何たるかを徹底的に解明しようとして洋行と執筆を繰り返し返したこと、この二つを語るだけでも明治が文明開化にみずからを賭していたことがわかる。

「文明の物たるや至大至重、人間万事皆この文明を目的とせざるものなし。制度と云い文学と云い、商売と云い工業と云い、戦争と云い政法と云うも、これを概して互に相比較するには何を目的としてその利害得失を論ずるや。唯そのよく文明を進るものを以て利と為し得と為し、そのこれを却歩せしむるものを以て害と為し失と為すのみ。文明は恰も一大劇場の如く、制度文学商売以下のものは役者の如し」

文明開化論者・福澤の文明に対する憧憬、旺盛な探究心、これを世に訴える熱意について改めてここで記すのはやめておこう。問うておきたいのは、福澤が往時の日本にあつてこの文明をいかに進めようとしていたのか、つまりは文明の進捗方法についての氏の考え方である。

福澤の文明論の要諦は氏の文明の発展段階説にあると私はみる。西洋諸國は文明國であるが、日本、中国、トルコなどは「半開國」、アフリカ、オーストラリアなどは「野蛮國」だという。つまり文明は野蛮、半開、文明と「段」を踏んで実現されていくものだと福澤はみる。野蛮國、半開國は、文明國との間に結ばされた不平等条約に呪縛されて容易に文明に近づくことを許されない。日本はどこに進むべきか。福澤は一気に核心部分に入る。

「目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。その目的とは何ぞや。内外の区別を明にして我本國の獨立を保つことなり。而してこの獨立を保つのは文明の外に求むべからず。今の日本國人を文明に進

るはこの国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり」

独立のために必要な国民が擁すべき徳目は何かと問うて、福澤は「報国心」だと答える。国家に報いようとする私情こそが、目下の日本人が広く深く心中に抱え持たねばならない徳目だという。

独立の気概がなければ文明への道は到底開けないというこのような論理は、帝国主義のあの時代にあつては真実であつたかもしれないが、グローバルゼーションの現代にあつてはそうではないかのような議論が長らく日本のジャーナリズムや教育界を被つてきた。

平和安全法制が成立して日本が同盟国アメリカとの集団的自衛権をどうにか手に入れたのは、平成二十七年（二〇一五）であつた。ジャーナリズムや野党の執拗な反対にあいながら辛くも成立した法案であつた。あの時に集団的自衛権を日本が手にできていなかったなら、ウクライナ戦争が本格化

し、これが中国の台湾侵攻を誘発しかねないこの時期に、日本は右往左往していたにちがいない。

国益の核心への侵犯がいよいよ差し迫つたものとなり、それでもなお座して死を待つ国家がどこに存在しようか。個別的自衛権の名のもとに、国際法上の個別的自衛権の概念を大きく超えて他国の領域に侵入せざるを得なくなるはめに日本が陥る可能性は、国家が生存本能を持つ存在である以上、十分にあり得る。この程度の想像力を持ち合わせていない左翼リベラリズムのセンチメントに私はうんざりしているのだが、福澤の生きた明治という時代の旺盛な独立心について、今一度私どもは目を向けてみようではないか。たかだか百年と少し前の時代のことではないか。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 俾浦のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・大分洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開拓館賞受賞。